庚子道光記

LA91
2

1843.

つゝうにそゝゆくなりし法ハむ事をやゝ
ゆへきを後にありていはれる枝そゝひそゝ
さゝる清き流をたゝぬるをされきをいとうし
とそ好ゝわゝの友清水演亜のぬゝハ河妙学
歴く文つるみやゝに仏ふかき人まるこれ比
こけゝの道比枝潜ておかれそゝつゝく女房の
日記ふそゝとれ学をやむふかしよ廃れあ
たゝ行まり学後宮のうちまるうそしける
庵まるハ仏ふきうに人乃おゝ人るたゝひも

うれしきあしとよくゝ見えてゆてそこきゝえと
ゝ理いくいへまを狩し給ふを什道乃祇
枝ふていくえをきゝるれ安のかいをわゝく
ハゝはあゝと本枝かへさひゝてあらハふれハ
けゝを河の源をよく波しまて清きつくあ法
をゝとゝゝるとこのあすひ枝いをむよハまへ
妙如有のなゝこ和をきむへをれさはかゝろゝむ
ゝとそれまを保ゝきを学まをみるをそひまけ
羅ふい謝ふ和の法ゝなる口つまをれどゝぬハ

いとゝはるゝのしきをゝいうちゝ人のひち
めりと四ちゝはゝ九ちきゝねゝるのみよゝく
なきゝ宿の世をかゝとてをしまよ春やの月ようた
ゐるうのしめのあうしなりさゝなんきつるさゝさ
はいへむゝとゝゝしるしほうよゝきてあ
九ゝきゝ花をいゝてゝうおもいてゝをむそゝいとのねを
ゝ袖ゝぬうゝたゝいゝたるを袖かむひゝめゝしひよ
さあゝぬるや

守重海

さ原野の夫ゝ秋ゝ色の秋のあるゝ一ぬゝを乃
ゝみ小のさゝまゝて小ゝ色ゝ落ゝ
ゝきゝゝ夢小かひよゝうきゝるわを
小ゝわゝ一ゝのゝて小の花ゝゝ色ゝの
ゝをゝなゝも花ゝるゝけるゝ小ゝたまを
わゝつゝみのゝのゝをゝ花ゝゝ色ゝるゝゝ
ゝ花ゝくあゝのゝ小ゝかゝるゝまゝのゝく

仁かたきをよろこばせ科の罪
をとがめ給へ南無阿弥陀仏

福子誌

康子道行記

中御門院御宇享保五年

禮樫弓下
婦人不越疆而弔人

朗詠　遊女

さゝ浪のよするなぎさ世をすくしあまのまなれ袖もぬれぬる

古今雜下　小町

わびぬるまとゐをとうきくさのなとなくてけふ水あふいうんとそ思ふ

後撰恋五云

一条うしふしてなんこゝろきこゆにやりとてくれハ鬼のかゝとなりてやれゝて　一条

おひしくハけをさゝ

ゝゝゝさやよわうちけてーのようかま

かゝ　伊勢

おけこれさいゝんそまとゝくちくらぬのうきをうゝる

女ハさうひをおゝえずとうをふるきあとまちいへされど
そいうあはけきく人のうへなめつあるけるのようぶるきを
ゝさいそふ水ゝはゆうあて西へすぐをとゝへさそしひてはひのを
けうとさぶあうひぬるぞあれ糸ひさまーさけざなるおうると
とそいうぶいをむひけまハぬるのあづまのをにめよはされぬセ
ゝせあまうなれ人くれるごうえなゝさうねぐれわやのお
をさんうゝをういそぶれをかのうちとひくをのぶかな
ふんゝなんあるふゝ人れ思ひくぶさんをけすぐにやさしう
をゝわづうきすぐなうゝるがくいふまでるをか尾張の
うに名古屋なうを」さけうぎけうあるるめうれけのう

按ずに一条ゝ哥の下の句を引風ひしハけうきにも鬼のかゝとあれより初みゆるきにもあゝすてあまうゝあまのひかるハけをゝゝかけとや人のおもひくぶさんとの気にくきつゝなゝー

治暦三年妙音院太政大臣師長公を尾張國井戸田へ流罪の事又熱田明神公乃琵琶の音に感しうしうゝゝゝうり盛衰記平家物語等ふくけくゝえゝう

夫木　景継

なくみゝゝたゝかひよ浦やうゝめん上邨けるを行人もう

志賀須香の渡のゝ増基法師の遠江の道の記及京孝標女の更科日記をゝゝ又

はきゝ者うくたびぶちゝぼそうかすたなる月のかすのそをゝよゝゝゝめれきいうもをゝあれまり。
あすもゝゝつをゝ四ん月ぶぐゝあうつきハ波れちゝゝる」
熱田の名所波よいづるれで夜あをにゝるゝ井戸田とふ所ハ
ゝゝやぶゝなゝさ人の志ぐゝをゝ行ひゝあゝ也琵琶の音に
神のめでたまひゝんぶぐいゝかゝ」宮海をゝぐゝゝて。
うをゝきゝ人をまゝてなるゝのあまゝゝびゝ海の大海路を行ゝ也ひめる
とハいへぶゝ今ゝ浦でふるゝハきゝて上野のゝのるのるゝうゝをゝで四
きふゝゝふなんゝるゝあゝ」尾張ゝ三河のゝのゝゝゝ志ゝ次者
ゝいふゝゝをゝよう古ゝ道の紀ゝのゝかゝれゝゝ今ゝふゝる

わらうあるともろびえ・境川とそほそそまるれりあるか
つちばし（土橋）ひとりかけらぬまでにかくまてて其人のう
つる・尾張にその人のりてまてはきてけく（其）
うかつもうぞ立ちきたるひがに後ち里をいでぬとれりへば。（殯）
ゆくしぶ後尾先をすきうくのを思ひ・三河のにあるほどハさ
そぶふなぐりもをしりるを・あるのことだるもうろざひ茶
さくにくつきてなどかきて・後色のとびきんまあと
まさへいふなるべし・ハ橋ハ中将のいらひ行ひ・所ろ・海も
かきりだるのさくまるあんるのついでなるねばよをまる
してすぎゆくものを。

伊勢物語
三河の國八橋といふ所にいたりぬ中略その澤にかきつばたといとおもしろく咲けり下略

枕冊子 名れそうき和
ひちりさ雨
六帖
いりてと行ときりの
ひちりさの雨ふるん
あまかくれきん
催馬樂妹門まち源氏
須磨まもりまひちり
さくあとともりくハ
万葉十一いもり門ひきひ
きりねつ久方の雨ふふ
らめりそをとりまさん
とありしとあやまわる
てひちりさ雨くふと
とはるきしてなるより 顕
昭法橋ちやくいつり

更科日記
あそひらくいつくち
とるなくしきりた
ま中略ひくるのいそ
ひえかりるそこふ
をきして雑波ろうに
くれハなくゆそく
うひいり下略

かきつばたとぶもあやしんまかりつるものをあれハ「橋」
二ハ山ハあてなりりん・家ハ山ハ所のりるべれども・矢
さぎの墨ちぐるほどより・名さへなつかしからぬ・ちりさ雨さ
うり出てくみのたくるいづるまでずさどもちさわぐほどいぶ（従者）
をさのうちまあるれがものもわぐえひ・「箱」といふ（駕籠）
ちり日をくれなるべし・御油の宿に雨すぎて行ぬ。
さるまハ女どものあまるこのアくだるをのんとるりき
なり・雑波わるるまでうたふまあるでぶまるるえ
してさるらふくるちとなるものいひきこを
世のづくみもひてけぬ旅やさけづくと思ふ人しるれば

紫式部日記
なにの心しもなけれども
川へいるんかこうりん
又えてかひらすかさは
よひさしのつき
松ひらけしふ祠あれは
も源氏須广同若菜上
栄花峯月太平記廿二等
にみえたり語釋は諸説
みな不叶予別に考あり

旅やどりは即旅宿也やどり
といふ詞はかならず舟の
泊のことをいふは時し
てその家居をもいへる也
月詣集に旅宿時雨を
民部卿成範
志もれの草引むすぶ旅
やどりてかれかなよはふ
そまうらふ
此外にも玉葉に慈鎮夫
木に李経卿懐綱なるの
哥みな旅やどりは又旅の宿
とえたくよめり

祝詞式大殿祭云
草能可 葉毛言止氏
又見六月大祓詞

あるが中に女のほそいりあるは人のまくらむすぶといふ」廿八日はと
めて御油をいでゝ田といふ所の橋をわたれば左にあたりて地
山のみゆるを人にとへば石巻山といふ。そのあたりたかき
峰のうへより不思議のことあらんとては此山のなりひゞくと（鳴動）
まことぞ紫のかくさ葉もやめし世にあるべしとみかくておもがう
てあそぶ人もあり」高師山なる文字によかきわたるいみじう目だゝ
しいづれ山よ何ぞとかくさする名をたづねにけん文み
やこさへまうしとおもふに山の桜はよぢるも何やし
ろいそぐ旅ならばえ人もと伸りけりたりし此山の花のしらば。」
湖見といへる坂の上よりは遠江のうみづらけぶくいえなきさるなかに

拾遺神楽 僧都寶因
ゆきかくるゝひえの山
ろのまふりいきさきをみの
たきもとやめてきけ
名寄 讀人不知
汐又坂松かきさらに
うし風よそしまの浪
乃花やちるらん
夫木 為家
きらし山ゆふえれば
やはらへはゆきしの浜
にかしおやくるま
枕冊子
浪は 白菅のやしり

山ふかしの浜とよめるは遠からぬなるべし。高師山にをのこのこなたの浜は
すなをだらう昔の事なりけむ。難波よりあづまへかよふ舟のみなと
この菅のみなとちかくおそあらき風にあふ舟は岩に蹈るる
まそくさをつるふ帆げたかぢなどのをままにするとかりけれそ。（桿）
十人ばかりのるものひとりも志づまぬぞなくたるが日数十九日経
しを我が女日にあけにりしも荒江の沖まで流れ着しものども
わかれつきてあらくれかりそ松の舟にて見けの新関所にまかり
てかへりしとやつまどかしもつまつりねとそおぼやけまでさこ
えたるをそうてなどかつけさをもひけるけそうの舟人どもの中
にも老たるがひとつまあくなりて猶このさいみなにてあくあがりて

今は昔ふうつすそ毎にかの海人のりてせうそこ
しぬくいすとなんだるかざりの面後の余もあるものゝやうの
所なん」浜名の橋をあくぞるはぐるたなしびる事里の名ホ
橋なんどいふ所のやむ一のかごうなるむ板田のそ一
ゆくべせめてたくさうもゆんを。
名のそのかゆをわれホ所れたるの橋ハあくだるる。
小宰相の君の濱名川へかきかれるよそ一れ沖も
ひのまるそ也とそみるつるもはなるべ一たゝの浜高砂の
沖などゝ和歌よあるとで哥にはよるまゝ浜名の橋ハ江
にかゝらも一橋あれど濱名川とよみ侍るもいつるそやなど

万葉十一
をそうこの板田のけ一
のこかもうくくさより
ゆんをこひそわきも

夫木 澳 齋門院嬪
方へ汐さしきるる

荒井を荒江といふこと
ふり

ふりのあるはぐるをぐれる毎の人のいでいかへのこと
をそさぶむべなり」荒江ゆゑそわるふ風もくるとづふ
しからぬ。庚よ賈鴻と云ふ人の并州といふ國よくしう任
なまをくけるる彩よかつのがくくる時桑乾といふをうすと
てらひけるけりしからるれ今多のくよひのをを
思ひいでいとはをうあれそいくるびのずくるよ文をいて
むくれぶけるるゆのもるをひとるる奥あと。

詠

客舎尾列已七霜。歸心日夜憶東陽。無端更渡新
江水。却望尾列是故郷。

かくずあををくこうして毎ぞうて見らふなるのそる

舉

度桑乾 賈嶋
客舎并列已十霜歸
心日夜憶咸陽無端
更渡桑乾水卻望并
列是故郷

論語先進
顔淵死顔路請子之車以為之椁子曰才不才亦各言其子也

松しめるみんなかもをみるあはひとつふりてをいつ
ゝ又ひらふまもとうはひさにつきぬ。ゆかゆきてひくは
のすくに屋どる。宿

ひめ小松ひくまの所でのかう桃ぐるねのびもをもとそれかる。

ゐるようまてて人くのいぎゐめれくふてるをとくゐくゐびやにく
はぎやけば。俗のはさぐるさとて今雪も春いぬ。制「引言野ふやや
くようと濱松もいふうぐふ濱でる松どりのおうく生ぬつしぐ。
風ようまてさるとゐるれるのいみうめでるくゐ。人のゐて
ぎくむこぎみるぐの茅ようる酒のみをもて濱松のなくいと
をのこどりのうるふこの不よりうことなくんり。

月に深伸をそんだ

十六夜日記
こよひはひくまのすくゝいふ所よりまる所のた
るの名は濱松をそうり

足利義教公富士見ゐ
下向の時ゝこの松のもと
ゐて俗松の音はざゝん
さとゝゝゐ酒宴ゝゐの
しより名はそていまも
颯ゝ松とて野口村の田
圃の中ゐありとそ

ゐ屋松ゐあらふく新ゝに大ゐきませいぎふうり移栄。
女とりぶちのりゐくだちえうるふかうちはゐめてなかりび
かゐれそぐろごゝ濱田侍ゐぐこそいひつまゝとくむふあゝびよ
のつゐれ人ゐをりのけぢはすぐゐめまゐなそびのりのゝよりうら
きまゝうゐずゝそみゝうるゐるようくあそびぐぐをう
かをゝくんゝうゝゐ。ゐのゐちゝても生をゝ。やゝそはゝくゝゐわふ。

廿九日濱松をよぶづに出ぬ。雨ゐり知ゝくゝゝゐゐりぶくゐう。
あゐぬりどれびゝ。深ゝいちゝゝゐ形。天龍川をゐるゝて。

舟さして雲のみを水脈ゆくゐちぬゐもれそうきてのゐ川。
濱佐上人のゐづゝめゐまゐひんむゝ人いゐゐ。梓の宗ゐ

伊勢物語
いくもりよちえうに
てあゐるゐゐゐゐ

源肉侍のゝ源氏紅葉賀
ゐゐ

催馬樂呂　我家
ゐいゐんとゐうちや
うゐもゐれゐるを松ゐ
きみきまぜいこにせん
みゐうゐるゐのよけん
あゐひゐゐゐをよみ
む

按上の哥ふ大君きませ
とよゐゐゐうゐにはゐゐ
ゐゐゐのよけんとつて
けゐゐいゐゐ

栄花物語月宴
はゐゐゐふゐゐゐ

翻譯名義集
那伽ニ龍とあゐされゐ
天龍川をあゐゐ

天のみろ川ともあるみの
のこころともあるみを
みるるるかともいつ
十六夜日記云天統の
ものいふを毎日のふ
西行ぶむりもひ出
ものいと心ぶそ
拾西物上人のこころの
ものて乗合のこと
をさこと　西行物語
くけ

漢書武帝紀吹毛求疵
後撰雜二　高津内親王
ふかきものもまるれる枝
もあるものをもふき
すどいるるるるる

藻塩草　為相
られそこのふるみ
門こと菊てふ布をけ
門のさと

兼久三年七月中御門
前中納言宗行此省の禁
昔南陽縣菊水汲下
流而延齢今東海道

てもしてくめれぬべし」こはたの宿
さしでたふもとふきびどりむ世ふつといつ
ものいふを毎日のふ　疵
西行ぶむりもひ出
ものいと心ぶそ
拾西物上人のこころの
ものて乗合のこと
をさこと　西行物語
くけ

鳥門菊布地名

うら門はちしは菊布かびるぬ宮のうちぎにていざりとめてん」
兼久のむすめを思ひいづる菊門いとあれたりや。神ちきうぬ
おとくらあるうこのふ。ふふ菊ふ人ものてぐるおとくこの
後ものぐるぐまれ。
こまるかやがきざふ西ゆてむすてれぐやる菊門のやぶ」
小夜の中山名所歌きとろるれば今いつもさこ也。光行紀
ほのかきまくるものるいとめいぼくあるさまよ見西。　西目

菊河於西岸而失命
ときいつけられこと兼
久記著聞集等に見え
ち

袖ちきうぬる

光行朝臣海道の記云
ものの中ふかる　中略
此やいその名こふ俗のえい
ふふるる多八一対の名とる
而ひたちこあるて井
るるぬけた下略
按武海道の記の哥ども
おかく夫木集に見えて
皆光行朝臣東行の詠と
もちること近世の人々が
鴨長明海道の記といる
ハ誤なり

東坂後赤壁賦
山高月小水落石出

ゆくしはいぶみをちぐぐれ　齢
ゆくれ大井川の水まさる
晦日面まるを日らるふるぬ。の京へ知ることふ毎水お
ちてゐいでちぎれでもいい淑ものるれど今やさう陽くふふ
むちつらまとおそ〜さいそんうたなりからうじくむかひ
ふきぬ後ろひ出るぐに菊あるくるものをうけるさいも
しいかもの板安ふ屋ものくもぐ〜たくて人まつほど。
大井川あれたるさらひくた岸のとる面やに美むむひ
とかりひやらる。渡田の入口ひぐのうこ並木のさくらうえと
まてだうようて亟ものるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
真

神名式無所見

柳佐地諸眉とゝふ烏帽子の名なり柳佐地を無位社人等着之諸眉八撰家小諸眉諸家十六以前諸眉十六以後左眉右眉仙洞召給也

伊勢物語に
ゆきくてすくるの國なるいとうめうつの山ふいとゝ
ゆて我いらんとするえだハいとくらうほそきに
つとくてハーくうぐいす
ほそくきをるるめど
えるものとゝふて修行者
あひうりかるえだいそ
ふまをすることいつをこれ
えみてくちうくう系に
其人のりとくて山み
うきてけく
きくくうのの山くの
けうるえるもくあハ
ぬなうくう

神名式に大井の神とをしへぬいづまの神をまつる人武蔵のくにのうまてこそ我国の庶民のをさぐるなるべ
ら国のめとうのけうくくふたんうんいでてまつうをる
なかざりれあさとゝうくび神坂小者の白鳥
彫刻門をうるえるゆると烏帽子山とを柳さびみどのいと
きうのくあいでめうろ眉のかをくふたりうるがいとをとゝる
字表の山越る修行者ゆうみてうあむうむ一柳絲の
くーぬるのいでるにけうてゆくなううほうしうみどく
いいもかちうくやはをしてむがはくくやさしび行者
どもハをえあづづきてつるにさうじゆのけうきをとふとる
歩行
ふまをすることいつをこれ
えみてくちうくう系に
其人のりとくて山み
うきてけく
きくくうのの山くの
けうるえるもくあハ
ぬなうくう

見えざうくうと彼ふそぐうなる文をごとづきたらば柳ゆ
かりてれのをまづうをてもえくくむとれるひゆるもり
みあうくや山のそそふをみをつをたうあを
やはをみをうろふはひ旅をうらば乙とよハ行をんうれ山べ水
えゆはをの井に樽の送るをとうけてるふまことふをくべえたる
ごうちくめづうくも表ゆるでれゆゆ谷川をみぐ
をはるるをえくめでうて
をうとうえくをちうれけてゑをれの浦の字表の山の
ゆをうのをくのうしうの山をのゆくゆれんうちれどうれ
てこのををるいうるとうへで巌のうあやくたうというふで春ひ

新古今春上　壬生忠見
やうしうるあハりえうん

かすが野ハ今も春の日よ
きえせざらなん

よの思ひくてに風さへぬけばいはらんわとなりし。

其の跡よ下もえいそぐさわらびをさのこえ人のやうにはらなん」

阿部川のほとりをくらある(?)ぞ志づはた山をけさうなん

見えくれば。

風雅春上 知家
たちゐそ志づはた山…のうぐひすよ声のあや
なる春の曙

頭證

鶯のこゑのあやめもわかぬまでにやくもむかふ志づはたの山」。

このよのやどりハ江尻といふ所也。そのかたハいまだしもせざりしが

どよそ伯父なりける僧よかへして京へのぼりし時此ところにたちよ

の僧の志るべする人なりければ三保の松原を見せしことありき。家のう

しろより舟さし出て富士のさししたる伊豆駿河のみぎし

よ清見の山をさへみえぬところなし。おい海も梓むかひにある所

禮内則云
女子十年不出中畧
十有五年而笄二十
而嫁

おちほ松原のうちにハ三保の御神のみやゐありて神なるあとの

めでたしたるが。鄙もひろくずさめるのわかくそすむ也。それより

妻子

見わたせバ海原の中にさしやかふさし出たる所なれバ。さらぬだにみれば

そらもなくめのをよばんとおもふほどにいたりてみまれバ

けもいはるゝなり波のかけ風の祥みどりこそまかつしかれ。それもよ

乃中みなろくまですべていはゆるさなきたるかちこゑ

を天神のこゝろの昔よりかきらまるあまたハ朝夕のけぶ

御厨

つきる事なりしぞ。家のハ大田といふなるふんやのさけそ六

位のものなり。娘をもりもてるをいつくしづかなるさま満

うどのなるをハむかしの娘よこそせめてことにひさしけれ。

筆

白氏文集太行路
巫峡之水能覆舟若
比人心是安流

大學助相當正六位
下

呂律のらべよこをあらひたてごとのいやげるもびるふ
ちぐちうめづらうなる。三保ハ姫神おなすれぐこそその
彼屋のむひとうなだびひくん神ゐどのあるちなくぶたやのい
ふんりとるぐくんとちり。娘ハ杉のまにうめとうをねよたけ
しやうにおぐえるれだうふるやなりにくんいふえてみどさ
ぐまうてるみどかうるそれとうえみよりのるど笠そこと
たるうるうもを旅籠の柏さぐ〜ふつさてかるくんのうくさ男ひ
少ら拾てこ長なつてが楽」。三月朔日江尾をいでれさい
乃のひぐかの名ふるれるれ京うえくあり。
清見ぐ霧のまうえるをハ浜ふあふ三保のれたら。

元政法師身延道記に此詩七言古詩ゑて起句殘月送吾清見関田頭猶見三穂邊とあり。

和名抄海藻類
大凝菜 本朝式云凝海藻古留毛波俗用心太二字云古ゝ呂布 此楊氏漢語抄云大凝菜

更科日記
其山のさまいとをかしうえもいはずさまかはりたる

深のよ人乃毎をまりて身延へまうでるひ。ふ殘月我を
おくる清見が関とはくられをかしうたなれぶ。えんにきなな
さまてゝ海げ思ひ出らる。今ハ波のゝ関りてむりのあいふるれ
ぐ特ん人と思るなり」。蒲原へかれ山ろの尤のうさに岩ゆる雪の
ちてうをきとげよりのまう巻ゝ出ろろぐ賣者あり。ぐの
ち九郎義経の欠の松とひつてえぬ。ゑをざるそれくへ下る松
冠者
ひ一時ばみのりとよそ旅へのみるでいるひさとはのなさ
ちえ一やうにいるを見人いみ。ぐりてどうふまぐさむりまどん
ちうう水のむもあるうう。」。紀行ぐ京ちうあぐの出ちうみ
ゆいぐでこうふい雪のたれびまそぐるのれりまうをこと

ろうかて。裾はなぐくみどりにうえはりいまめよるすそご
の几帳などそたらんさまの。業うるて葉うもひはそてど
あさくきなう塩尻といふ名のあてうもゆえめを。京極中
納て紙ふくしかく思いるひうんをとりうるや。
ちうとりるいてふ山とかさひてやをてるるふの茅なりくむ。
かくてゐなのおかをとうりつ沼沼のさくにをどる。」二日八岡を
こゆて疾ゆうくさちて星のえりうやさうむこ
ろ伊豆の國府にいく。三島の神の御社の宮ふきぐいふ
ほど。女はさうちうてえちうでびんだうれめさるふり
いでて。

定家卿伊勢物語勘物云或説云塩尻壺塩と
ゆるのあり其尻似此
山此物語之習好早詞
寂蓮殊信用此説先人
命縦雖爲塩事凡卑也
不可用之云々

和名抄
月水 俗云佐波利

ちうとりるかやうえぬ
ゆるるをしく今もそこに
ハ愛のえやくるうくよう
さ人いつり

金葉集 権僧正永縁
きくこひるめつけ
をハ問るいつもけつの
うちうそ出を
按式哥ドウ初音僧正
とよくれ〜より袋草
子につえうり

八雲御抄異名部云
盗人 みとりのやし
緑林の賊のり後漢
書光武紀ゴウえたり

移めへうみまの神のうちうもうめるものハ家多なりるる。」
さて移山よへふ神ちづ京といふ所をさぐ桔ふ杉のしただて
うちに宮のひるどりの巣そちうるぐ杉ひくなくさきくに春
ちやはくまてれど杉めつくきさちちの伊勢の俗正にさうせ
なら神うど郭云なうでも杉ぐすんよるどいひくずるへ
ハ哥ちむもるべ。」みりやるどいあうハ兵どうの来ちぐうなる
義とるのみくらふちうあの強り人をうどうハせてこと受
かるるこうあ長人ハ里人の家居もひまるめちぐさて
るえむうき御代なわだん拾うて馬のよさの用をでにいる
限うハ移ぶうてさえも移也。」山井といふ所よ京橋のうえゆるを。

枕冊子
かつらまつりけさ〜けさ
ふる霜をさへとりおろ
つるこそ〜

新撰字鏡
髪髪 髪乱也不久太
女利

ぬるこげ茶椀の山のいと様あるべいどもるのこぎぬ受
といへど月の夜るでいらの方をあれるくとてらふだる
嬢そていひ知ることいふ光のよ今ひとさんたちてはれさへれ
ぬ四ど後ひるかさんもものうくてはく寒し也年の時ぶう
月宮ふるる山のうひよくくざめよ去ら丁関屋のいろや
なぐひなどきしくくらわらをればちるさ身もひとり
ふまよりさへぬるふかこきぬくしるの笠を扇もとう
きたれだけうるあれてふくぶそる髪のこぼきれ
ていふるぶまくあせひのそてうさいくあそびぶ
りうなどひいくのほうなる宮あくそていさくのさうえる

駕籠といふ名自麻苑
院殿嚴嶋詣記にええ
う

枕冊子
ぜちハ月にたくいる
しさくふよもきる
のかをうあひくもい
しうとく九重の御殿
の上をくめそいとら
ぬくみのすくくまそい
そはうりくいたくく
くんくふきはくうかれ
いくめくくいつこ
とうハさハきはくく
云く

菅家文草巻五
花時天似醉序云
春之暮月月之三朝
天醉于花桃李盛也

和名抄云
餳 考声切韻云餳古
反字亦作饎蒸米屑爲
久伝毛如比蒸米屑爲
之文徳實録云嘉祥三

く通しぬけうまきしとやいさまいかたしとやいさまいかた
ハ坂ひのまくこゆるふ山かる花もふくうりとてあゆくるし
きくのうくはかちそてどうくるまいいくうつまこうじ
ぬ畑湯な風ふ小田ふ泉せちいさつまくうやされど除生のこ日
こそ心をたれやどそ桃のうりひにうくくうくくさいあや
めのうぶさ初をかくくれたぶ雨どうれぶらえる接ふ門の影す
ふほどこのはのはうくはりいで
月川まぶひ造本をあまのあのうくうくとくやうくん
門をうくまぶ海匂とくくる里たりたゆうざの孤ちうき笞屋の内
ものひくるあそびまくるをとめどもるひ山ぜさの花みどうち

年誹言曰今茲三日不可造餅以無母子也

後拾遺俳諧　實方朝臣
みるのよのもちひはくえしまちりけきけはよもけこうむるり

さらきまで餅にさしはふの日のくるゝをまちしと思へるさま也。
餅の出きぬるにこそなとつむきするを、きのふのもちひの為なるべ
し。七とせのむかし此所をさりしは九月九日にておなじ親たち
かしこくたゞよはせしかば、かなしくもおもはれし、正月の二日のうち
に遊ばんことをたのしみつゝ、ふられきさあまりんさへとゞめきして。
そこはてなくうちさみがちなる形ながら人々ありもうらはものゝくゞ家
ほしさるや見じもこそ見んよ、明日は府にまゐるをばわかやけれ
ぬく船どもいへりかくて、男のかぎり皆た塚の君まとい
そぐまゝに。思ひとりのこゝろも行めぐくてねたげさ猶よ庭
どりよ川まぬ」三日の朝より雨ふりいでてつとめても猶やまず。

今川河崎亦門などいふ路こゝもたゞるふすぎて芝にまゐる道
あり大路のさま面たゞきいと中まゐ神をつくるなまたふくめきに
もりかはえぞしくさぎえへるなしきも七とせの程ぶり一ときさ
にさめしおもちてられ、さいはんこと殊し。夜もさ
御館にあるまゝく、三月五日といふまでふる故家居のまゝかへりぬ。」

親族

いふひるるまでとおほくのうからちらきはなにくれとこまこと待
何つまりてなりくよ何くれをいふもまいりあひくればなきいわき
いもうとのひとりあるもいつの程びまさりて繁なとあ
りさばわりくたよひとすまじくそとかまどうちいでん
もつきまじくやありなんとぞのちしろにかくまでてあまう

宇治拾遺巻一

あつまのくにの人、一度にさとりをひらきまれる事

佐々貝八ヒロの天城より六七里いぬゐの方にて日ちひとしふうまやのちかきあたりにて

らめとおもふ巻きをよみ見れば、特心得をもて
そこなひのまゝいづまりのまちうどるたれそのゆ
しげなるとゝ小法師をどる物をぞ見る。母のたりげる所
さまをさてぞ物がたりひまめるふとゝぐがきいうつぶる
なりてはゝりもうてげずをぐもはかをまりてりの以も
やゝまぶみるをゝわらふるぞたゞめてんづをぬかゝて盃ぐ
まりぐ。をゝる文の侍る目にいまひがやがてまゐ侍る

ゆいもうとのつ

いてもをしてよりのそひくゝつやう孔もの言乃巻の尼
にその名きゝ元つゝそれる学ゝ数をゝれかゝる者
あり侍るをこのなをのもれ物ゝ勅撰をけのせるゝ
を以ゝ古今孔出女後撰乃拾遺後拾遺ゝ宮木詞花小
倉続詞花ゝ阿古麻呂ゝ載ゝ尼ゝ新古今も如玉葉は
初ゝなゝ又ゝ後の冊子ゝ毋撰集物ゝ江乃尼
このゝ中ゝ載ゝ孔載しゝより盛衰記孔侍る湯谷平家物
語乃祇王義久記乃亀菊首我拾遺の虎ゝ物ゝ皆人ゝ毛
きゝれゝ毋申ゝ孔ゝ侍ゝ一つ二つゝみ
出ゝゝの人乃耳ゝまゝる侍る物ゝ孔ゝ孔を侍ゝ

してはのしくさるしたる物ともえきたるなどにけるを
おのつからみおひたる草乃あらそよひれてをりまれ
ゝ出さをわさ有へくれたるそこの花ゝ咲ゝ竹林をか
河の泉殿をみて深くもんなる思ひいれたるあらむやかの
檜垣孔おうれこのやうに家集さへ今ゝおせるそまれらあるを
ゝ孔年ゝちよりて二三正年このかとをみやひとのおうくおを
ゝへ来ゝ年ゝ女房ゝちゝ殿孔たまへなどに名ゝまつはる
女房ゝちすゝ色抱のゝあゝあみめる系ものつゝあいてたるなむ
をもくまさゝ元めいゝちきゝゝそれゝゝみたるもこの右陰日記に
この以ゝあるあゝみかきつゝれるを今孔学の名つゝきゝゝ

人ゝ以ゝあゝれとあゝまをくゝきゝゝてひをわゝうゝる
ゝゝ目乃以ゝまゝゝゝゝ松ゝゆゝをそれゝゝ時頃の女房
きれひゝをまねをも得つゝるゝ以ゝむまゝゝ以一巻加き見記
新し武女ゝいゝるは享保孔ゝろゝひ以ゝけゝえ花やゝゝま
ゝるそれ乃殿孔うつゝゝゝ有ゝめのはせゝ有ひ公物ゝを
以ゝゝゝゝそ孔れのゝゝめをは色孔ゝるゝきゝつゝへねを
きゝ孔今ゝの華すゝひをゝを色ゝに言紫ゝゝゝく書
あゝれ新るゝみゝあゝ孔そゝめゝゝ孔ゝく物ひ以のをゝて
孔れゝるゝにつきゝ乃紫の物俗清系の以ゝし物ゝよゝく後
ゝあゝをへすゝて以ゝ孔るゝを加ゝまゝてゝうゝくゝしゝも以ゝ

松平屋敷にて見つけ出したる
ものにて今世にまれなる奇人にて
ものしれぬかくあるものとも
うに以前のひまに何やらかの書墨にて
かたうつしゐ筆そへ松平屋敷にて清書あるとて
板にさへ書てもと思ひ出しよりて文化といふ年の
四月になりつゆとなりまりみの社殿清水社濱臣主の
地社みまは別なる所社にまた書て身新て
書しまあてを出して
うなん有社記